

# 1964年東京五輪・メダリストに聞く① 日本選手団主将の 意地が導いた 金メダル

肩よ、腕よ、  
あがつてくれ

「鬼に金棒、小野に鉄棒」と謳われた小野さんは、1952年のヘルシンキ五輪からメルボルン、ローマ、東京と、4度のオリンピックに出場。4大会で13個のメダルを獲得という快挙を成し遂げた。だが、実は小野さん、ローマを最後に引退するつもりだったというのだ。

「当時、私は大学を卒業して、東洋レiyオン（現・東レ）に就職したこともあり、ローマで体操は引退という気持ちがあった。ところが、（体操）協会の方から『東京までやってもらわなきゃ困る』と言われましてね（笑）。ただ、会社では入社後1年間は地方の工場勤務が義務づけられていたので、私は滋賀の工場に行くことになり、1年間は滋賀の工場で練習することになったわけです」



1964年東京五輪  
「体操男子団体総合」金メダル  
小野 喬さん(85歳)

1年後、東京に戻った小野さんは母校の東京教育大（現・筑波大）やYMCAで練習を再開したが、

「ちょうど、東京五輪の最終選考が始まるころ、会社で中堅社員教育が始まったんです。これは朝8時から夜9時まで1週間合宿するというもの。体操は1週間練習できないと筋力が落ちてしまいますからね。唯一あった50分の昼休みを利用して体操の練習をしたものです」

結果、最終予選を6人中6番で通過。見事五輪の切符を手に入れることになった。ところが、過度な練習がたたり、五輪直前に肩を痛めることになってしまったのだ。

「練習中に生じた痛みがいくらマッサージをしても、なかなか治らない。選手村にいるドクターに相談すると麻酔を打つしかない……」  
麻酔で痛みはとれたものの、感覚がなくなってしまう、演技の勘が

つかめない。最新治療の電気針を使うためか、電気を通すとすぐに針がポーンと飛んでしまう。

「苦肉の策で演技する順番を最後にしてもらってね、麻酔が切れて痛みが出てきた。——これはいける、と」

なんとか午前中の3種目を終え、選手村に戻ったものの、痛みで昼食のトレイが持てない。

「午後にも3種目があります。そこで練習を辞めて本番にすべてを託すことにしたんです」

とはいえ、肩の激痛は時間を経るとさらに悪化していき、  
「正直、最後のあん馬は、とてもじゃないが出場でき

思い出の一枚



「世界中の青空を全部東京に持ってきてしまったような、すばらしい秋日和でございます」の名調子で紹介された1964年第18回オリンピック東京大会開会式で選手宣誓を行なった小野喬さん。(写真:フォート・キシモト)

「10年くらい前だったか、急に肩が痛みだしたので、医者に診てもらおうと『じん帯が3本切れている!』と言われてね。東京五輪の時に切れたらしいんだけど、あれから40年……それまで痛くなかったからわからないかったんだね」

強靱な肉体と頑強な精神力。それを支えたのが日本選手団の主将という大きな責任だった。

「もともと秋田の人間なので我慢強い。絶対に金を取らなければいけないという気持ちでやってきた。だから、痛くても棄権できなかったし、そんな頑張りが若い人たちのチームワークにも繋がったのだと思います」

## スポーツで 地域社会の活性化を

東京五輪で現役を引退した後、小野さんは妻で東京五輪の体操女子団

体総合銅メダリストの清子さんと、東京・大田区に「池上スポーツ普及クラブ」を開設した。

選手時代の海外遠征で見聞きした外国のクラブ制度を日本に導入し、スポーツの底辺を広げたい、という思いが強かったからだ。

「日本でスポーツを支えるのは学校の運動部と実業団のふたつ。一方、人口8千万人程度のドイツには9万か所、所のスポーツクラブがあり、クラブの中に指導者養成のスクールがあって選手だけではなく指導者も育てていきます。つまり、日本でもスポーツクラブを中心とした振興策が講じられるはずなんです。それがスポーツと地域とをさらに結びつけることになり、ひいてはスポーツに関する人材育成にもつながる。そうならなければ将来的に日本は世界から取り残されてしまいますから」

前回の東京五輪で日本のスポーツ人口は急増したといわれる。だが、底辺が拡大したかという点、まだまだ疑問だという。

「2020年の五輪を機に、スポーツの裾野がもっと広がれば嬉しい」  
そう願う小野さんだった。



おのたかし ● 1931年、秋田県生まれ。東京教育大在学中の1952年、ヘルシンキ五輪で体操競技日本初のメダルを獲得。その後の出場した夏季五輪3大会でもすべてメダルを獲得し、日本の体操界を牽引。現在は公益財団法人日本スポーツクラブ協会の相談役としてスポーツ人口の拡大とクラブ制度普及に尽力を尽くしている。